

715
100

715-100

1200501585711

風
萬葉古蹟百首

鴻巣盛廣著

7
5

715
100

しらやま風

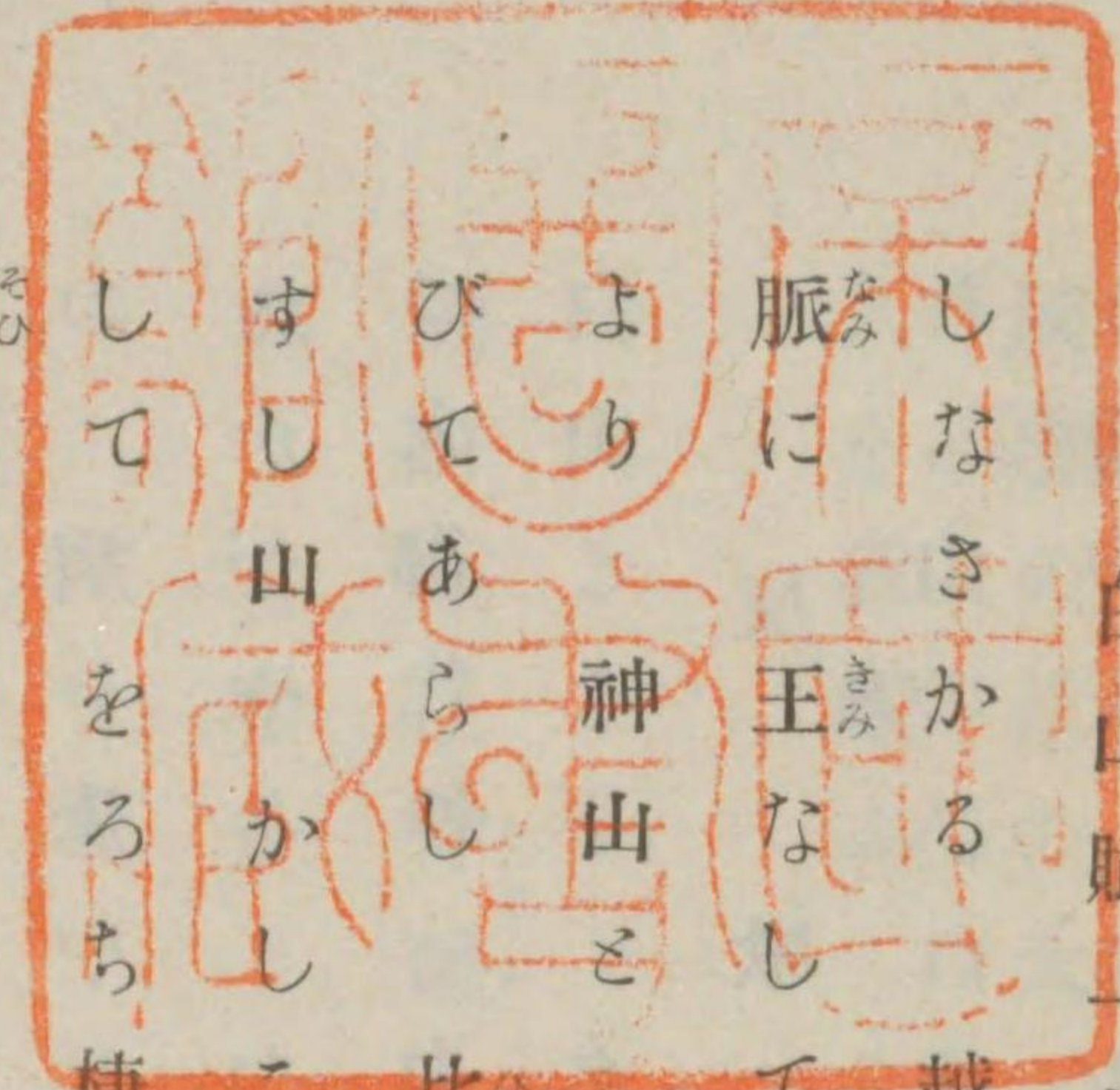


詠北陸萬葉古蹟百首

鴻巢盛廣作



715
100



白山賦一首并短歌

々	は	岨 <small>その</small>	し	す	び	よ	脈 <small>な</small>	し	
に		より	て	し	て	り	に	な	
羽	谷	落		山	あ		王 <small>ま</small>	き	白
色	間	つ	を	か	ら	神	な	か	山
を	に	る	ろ	し	し	山	し	る	賦
變	咲		ち	こ	比	と	て	越	一
へ	ま	石	棲	き	咩			の	首
て	ひ	激	む	高	神	簞	高	山	并
		る	底	峯	の	え	き	々	短
ほ	は	瀧	ひ			て	白		歌
ろ	ひ	の	な	尾	う	あ	山	そ	
ほ	松	白	き	の	し	る		そ	
ろ	の	木	池	上	は	ら	大	り	
と	蔭	綿	岩	に	き	む	汝	立	
	に		く	は	い	瑞	山	つ	
妻	雷	綿	え		ます	山	と		
呼	鳥	綿	の	さ		神	神	そ	
び	折	綿	の	さ		御	の	の	
か		綿	の	さ		代	山		

はす 山祇の 御花畑に 五百種に いささ
花咲き 荒熊の い隠るあたり 白樺 梓は
茂る あやしくも 温泉は湧きて うつそみ
の 病を癒やし 時じくに 雪は消えあへず
まかがやき 白金なせり うべなうべな 遠
つ大御代ゆ 白雪の 積みて成る山 栲衾
白山とこそ 名づけけらしも

反歌

むら山のひれ伏すが上にしろがねの冠かかふ
り聳ゆるしら山

國府の丘の大き槻の木遠き代の汝だに知らぬ
人を我戀ふ (越中國府の舊地にて)

國府の丘背面木暗き杉の野にさをざる雉今も
鳴くらむか (同上)

國府の丘槻の梢の夕きやぎ二上山に日は入ら
むとす (同上)

風そよぐ國府の岡べの榎の若葉銀杏の若葉榎
若葉かも (同上)

奈古の海人の千尋栲繩長き日も見飽かずあり
けむ國府の眺は (同上)

國府の丘秋はさびしも犬蓼にまじりてそよぐ
水ひきの花 (同上)

五百萬材木並び浮く射水川朝漕ぐ船の歌ごゑ
もなし (射水河所見)

國宰相馬打並めて荒磯行けば舟たな打ちて漕ぎ
出づる海人 (澁谷の磯懷古)

打寄する海松なのりそのこたぐに荒磯あや
しき香のただよへり (澁谷の磯所見)

都^つ萬^ま麻^ま生^まひし澁^し谷^や山^のの片^のくづれ磯^{いそ}廻^ましがたく
なりにてあるかも (同上)

仰^あぎ見^みる都^つ萬^ま麻^まの廣^く葉^はきらめきて春日^{はる}を浴^あび
て立^たてり家^い持^ぢ (都^つ萬^ま麻^ま懷^い古^こ)

いぬ楠^{くすの}を都^つ萬^ま麻^まとかうがへ澁^し谷^やに歌^{うた}碑^{いし}立^たてし
肝^{かん}煎^{せん}宗^{そう}九^く郎^{らう} (都^つ萬^ま麻^ま歌^か碑^{いし})

鷺^{さぎ}の子^こ産^うひ二^に上^{じやう}山^のは焼^やけただれ赤^{あか}き山^の膚^くに秋^{あき}の
日^ひは照^てる (二^に上^{じやう}山^の山^の火^か事^じのあ^あとを)

奈^な古^この江^のの沖^のの小^の島^のに雨^{あめ}煙^{えん}り鴨^{かひ}が音^ねさびし葦^{あし}
間^まがくれに (奈^な古^この江^の所^の見^み)

舟^{ふね}もやふ奈^な古^こ江^のの岸^のの枯^か柳^{りゅう}鴉^あ飛^ひび立^たたす首^{くび}を
か^かし^しげ^げて (同^{どう}上^{じやう})

鱚なまことる海人はかへりて奈古の海や日高き沖に
舟かげもなし（奈古の浦所見）

遠々し奈古につづけるいさご原これや信濃の
濱にかもあらむ（信濃の濱）

見はるかす松田江の濱まなごちのはてに霞め
り能登の山々（松田江の濱所見）

氷見の江のみなととよもす夕浪にをどる魚あ
り（氷見の江所見）

東風あゆをいたみ千重しく波はさわげどもはらら
に浮けり棚無小舟（氷見の海所見）

氷見の海の沖つ唐島からしま波越えて東風あゆは疾風はやてにな
らむとすらむ（同上）

氷見の山山風すさぶ山畑にゆららゆららとゆ
らぐ菜の花(氷見より能登へ越ゆる山路にて)

惠具摘まむ少女もあれな山澤の流さやけく躑
躑にほへり(同上)

山風は吹きに吹けども丈をひくみ山田の蘭草
そよぎだにせず(同上)

布勢の丘のつらつら椿つらつらに思へばかな
し遠き世のあと(布勢水海の舊地、圓山にて)

歌しぬび古へしぬぶ布勢の丘べしきりに落つ
る紅椿かも(同上)

神さびて垂姫の崎乎布の崎並びてあれぞあせ
たり布勢のうみ(布勢水海の舊地に立ちて)

恐ろしき醜しこの鬼蓮をいはらす布勢の海の名残の小江をわに誇
りにかに生ふる（同上、鬼蓮は天然記念物に指定せらる）

布勢の海はやさし名どころに鬼蓮ひろごり生
ふる醜の鬼蓮（同上）

風をいたみさざなみ越ゆる苗代の畔うらを蔽ひて
芹せりの花咲けり（布勢水海の舊地今は水田となれり）

多祜の浦や湖はあせぬれ丘の上にいつかれい
ます神樹藤浪（田子藤波神社）

浪清き英遠の浦廻うらみのまなご地に東風あや寄せた
るここだくの貝（英遠の浦所見）

かち藻乾すあやし薫かぶりにむせびつつたざれば入
りぬ宇奈比の里に（宇波途上所見）

鮎はしる瀬とは思ほえず宇奈比川しづかに湛
ふ海近うして(宇奈比川所見)

焼太刀を礪波山なみなごやかに越ゆればうま
し越の中つ國(礪波山所見)

山すその鉾杉の末ゆき霧立ちたそがれそめぬ
礪波山なみ(同上)

とめて來し礪波の關のあとごころ花吹雪すも
風もあらなくに(礪波關址にて)

國宰國めぐらすと處女らは葦附とりけむ赤裳
ひづちて(雄神川懷古)

水底のつぶらの石に疣じものここだ重なり生
ふる葦附(葦附採集)

歌^{うたのじり}聖食^をしてめでけむ葦附の舌なめらなる味の
よきかも (同上)

鵜坂川下ればやがて賣比川の早き瀬毎に鮎兒
さばしる (鵜坂川と比賣川)

尻を打つ音の高しもあはれあはれ里の妹^{いもうと}なね
めぐくやはあらぬ (鵜坂神社懐古、この社のこと萬葉に見えおど)

今打つはいくつなるらむめづこのとじ打たる
る音を數へてをあらむ (同上)

いにしへの賣比野やいづこ見はるかす千町稻
田に穂浪たゆたふ (賣比野所見)

鞘をはらひ焼太刀あまた立て並めし様にも似
たり雪の立山 (立山所見)

いさご原岩瀬のみなと萩咲かず鳥獵すべくも
思ほえぬはや(東岩瀬にて)

石瀬野の萩の秋野の初鳥獵いく度君が夢に入
りけむ(石瀬野にて)

水ぎらひ水沫流るる延槻の早き川瀬に駒の足
なやむ(延槻川懐古)

片貝の河瀬にはかに風立ちて河上暗く神鳴り
はためく(片貝川所見)

國宰先づ駒とめて水や飼ひし志乎路越ゆれば
さやけし志乎川(志乎路にて)

朝なぎの羽咋の海に舟よそひ待つべきものを
おそや里人(羽咋の海懐古)

いつきまつる大國主の荒御魂越路なびけし神
代しぞおもふ(氣多神社參拜)

みどり濃き氣多の神南備潮風に音さやけきは
松の末うねかも(同上)

香島の津千舟つごひて賑へり百さかの舟棚無
小舟(香島津懷古)

香島の津水夫かこととのふる聲すなり百さかの舟
朝びらきすらし(同上)

岩くえの岸にあやふき荒磯松まつと妹が言は
ば歸りけむかも(七尾灣船中の家持を想ふ)

香島より熊來をさしてみこともち舟出せすか
もしづけき海に(同上)

楫かぢの音のつばらつばらに物思へる若き國守の
まみは濡れたり（同上）

温泉湧くわくらの濱の湯のけぶり知らでや過
ぎし旅のうれひに（同上）

夕寒み雲のふすまをかかふりて横ほりふせり
能登の島山（能登島所見）

とりよろふ能登の島山沖さけてそがひゆ見れ
ど愛はしき島山（同上）

舟つけばそこに岩ありその岩にただみい這
ふ机嶋の磯（机嶋所見）

千本松木末こねそろへて並み立てる島廻みおもしろ
しただみ拾ひりひ（同上）

昔おもふ机の島の荒磯廻みにい這ふしただみ靡
くなのりそ (同上)

手もすまにたぐるたぐ拷なほ繩千尋繩しとごにぬれぬ
海人が腰みの (同上)

海松みわかめいや生ひ茂り熊來のやら寄り來る
波も脚おもげなる (熊來海岸所見)

夕汐に木づみただよふにぎし饒石川水占みなはへしあと
の知らなく (饒石川所見)

遠々し妹を戀ひ泣く歌人のなみだに濡れけむ
岸の芝草 (同上)

珠洲の海の岸のつかさに鹽田作りうしほ汲み
あげ鹽を焼く海人 (珠洲の海所見)

風をいたみ島の高笹さやげごもしたただみとる
と我は磯廻す(珠洲蛸島にて)

國引にはふりしあとか都々の岬岩床くえて波
の洗へる(珠洲の御崎にて、出雲風土記を想ふ)

能登路はてて國府へ舟出す珠洲の海べ守は嬉
しと下笑ましけむ(珠洲の海懐古)

真帆あげてきすはみんなみ珠洲の海のこの朝
開き真幸くありこそ(同上)

舟よする長濱のうらに長き旅はてて家路の月
夜おもしろ(長濱灣懐古)

ただ越えの礪波山路とはゆま路の能登路と別
るる深見のうまや(加賀深見村)

一重山間におきて友しぬび花しぬびけむあは
れますらを（深見村懐古、大伴池主の歌による）

白山の峯越す風の吹きしけばみごりにけぶる
加賀の國原（白山）

とめ來つる武生の國府は春寒し丹生の山べに
はだれ残りて（越前國府所見）

日野山のこごし影うつししらぎ川たぎち流る
る瀬の音さやけし（叔羅川所見）

しが鱧をおくりやりけむ鶴川立てしらぎ川せ
に鮎をくはしめ（叔羅川、大伴家持の歌による）

守殿のうたげも果てて丹生の山かたぶく月に
鳴くほととぎす（丹生山懐古）

丹生山の卯の花月夜さやけみこ國府にをちか
へり鳴くほとこぎす (同上)

罪人の涙の鋤をはじめにて今味真野に隈なし
田畑 (味真野所見、中臣宅守を想ふ)

吹雪する日野山風に味真野のちがや押し並べ
庵せりけむ (同上)

鴉の海遠く船泊て有乳山越ゆればさびし越の
海山 (有乳山所見)

白々と風はさびしも有乳山ゆふ霜寒く落葉雨
のごとし (同上)

氣比の海や松原ごしに眺むれば榮螺の岳に雲
わきおこる (氣比の海所見)

松浦船渤海の船伊豆手船にぎはひけむもこれ
の角鹿の津(角賀の津にて)

松青き磯をめぐれば氣比の海や田結が浦に烟
立ちのぼる(田結が浦所見)

藻鹽焼きし田結が浦に立つ烟石灰焼くと聞け
ば悲しも(同上)

磯田わたる涼しき風に霧はるる五幡山の眞木
の色かも(五幡山所見)

鹿蒜山越えてさやけき鹿蒜川川べにいつく鹿
蒜の神南備(鹿蒜山)

水草生ふる三方のうみの浮ぬなは茂りからま
り魚もおよがす(三方湖所見)

捨小舟朽ちたる中に水草生ひ紫ゆかし水葱の花の色
(同上)

後瀬山松はみどりに村立ちてうまし小濱の里
にたたなはる
(後瀬山所見)

ほがらほがら宮居の杜は明けそめてき霧はれ
行く彌彦の山
(彌彦神社参拜)

二ならぶ彌彦神山たださすや朝日照り映えい
や神びいます
(同上)

かあいらしく鹿の玩弄物の店にならぶ彌彦の
里の朝のしづけき
(同上)

萬葉集全釋完成の日よめる



遠長きならの林の木ぐれ道足^あなやみつつもた
どり終へぬ我は

たまきはる命にむかふわが業と命をしみてつ
とめけりはや

歌解くと幾年かけて朝にけに筆とりてあれば
髯白うなりぬ

夢いぶに思ひさめて考かうがへ又夢に思ひつづけぬ解かき
がたき歌

おほけなく千々の誤傳へけむ世のさかし人正
せあやまり

世をわすれ身もたなしらす筆とれば嬉しくも
あるかわが書なりぬ

さきはひの乏しき男あはれみて神やたびけむ
これの刷卷

ちちのみの父のみ靈にささげつつ新刷卷の前
にぬかつく

ちちのみの父のみことのいしいしとめで給ふ
らむ聲するこち

吾をたすけ二十とせあまりいそしみし妻も嬉
しと涙垂りをり

一わたり踏み分けをへしならの林またたもと
ほりわが世過ぎな

天地に満ち足らひたる大稜威そのみめぐみに
成れりわがふみ

萬葉集全釋の成れるをよるこびて、友垣あまた集ひ吾が爲
に宴の席開くと聞きて、櫃の實のひとり歩み來し道にも、
かかるはえはありけりと嬉しきものから、厚き志に報いむ
すべを知らず。ここに幾年かけて、しなさかる越路の萬葉
の名どころ行き廻りしあひだに、わが詠みたる舊き歌ども
のあなるに、更に新しく作り加へなどして、海人の藻鹽木
からくも百首を得つるを、小さやかなる刷卷として、つど
ひませる人々に頒つこととはなしぬ。げにおほけなくやさ
しきわざなめれど、かつは後のしぬび草ともなれよかしと
なり。

昭和十一年十一月

昭和十一年十一月二十日印刷
昭和十一年十一月廿五日發行
〔非賣〕

著作兼
發行者
鴻巢盛廣

金澤市上柿ノ木島一番地ノ一一

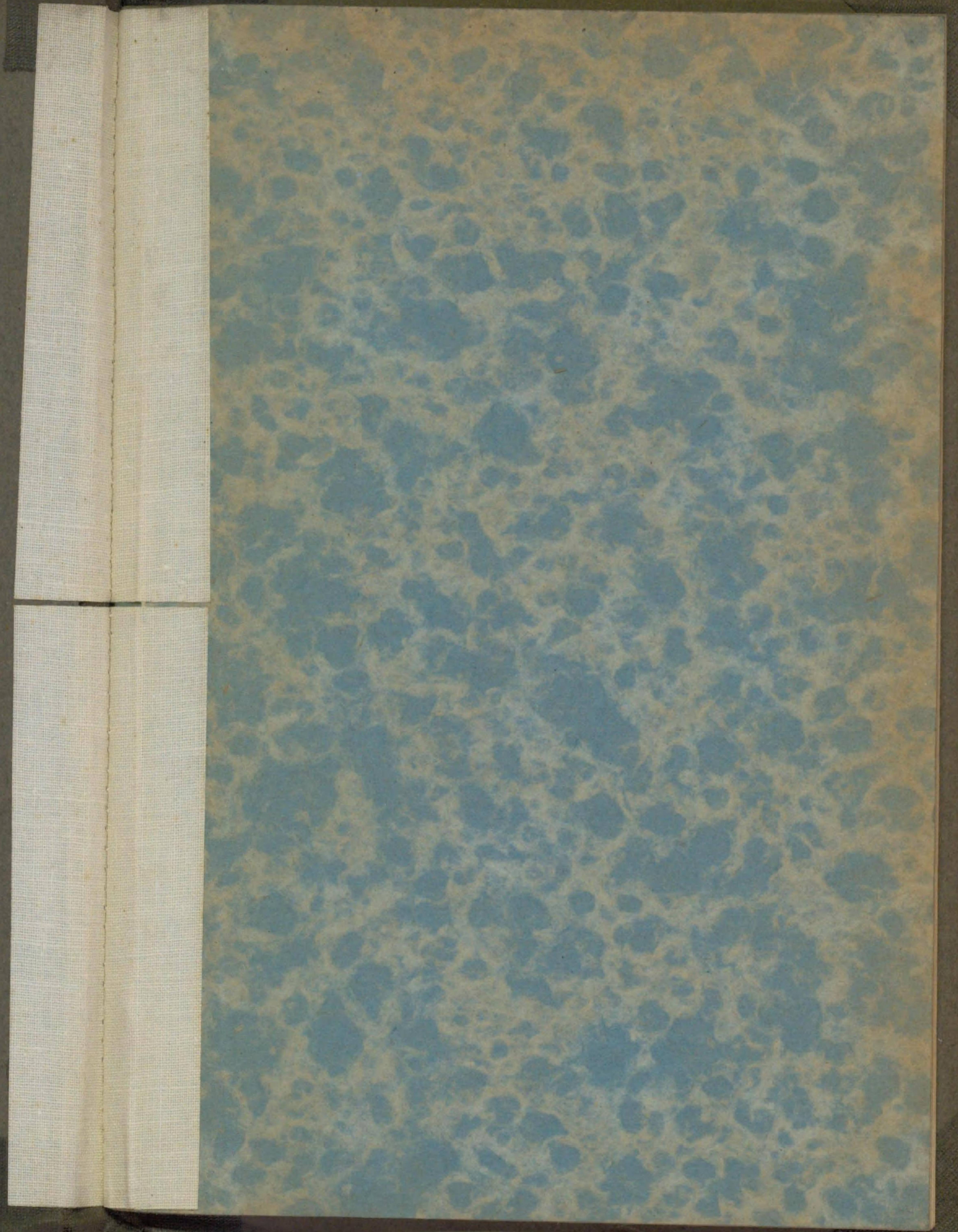
印刷者
中川外喜男

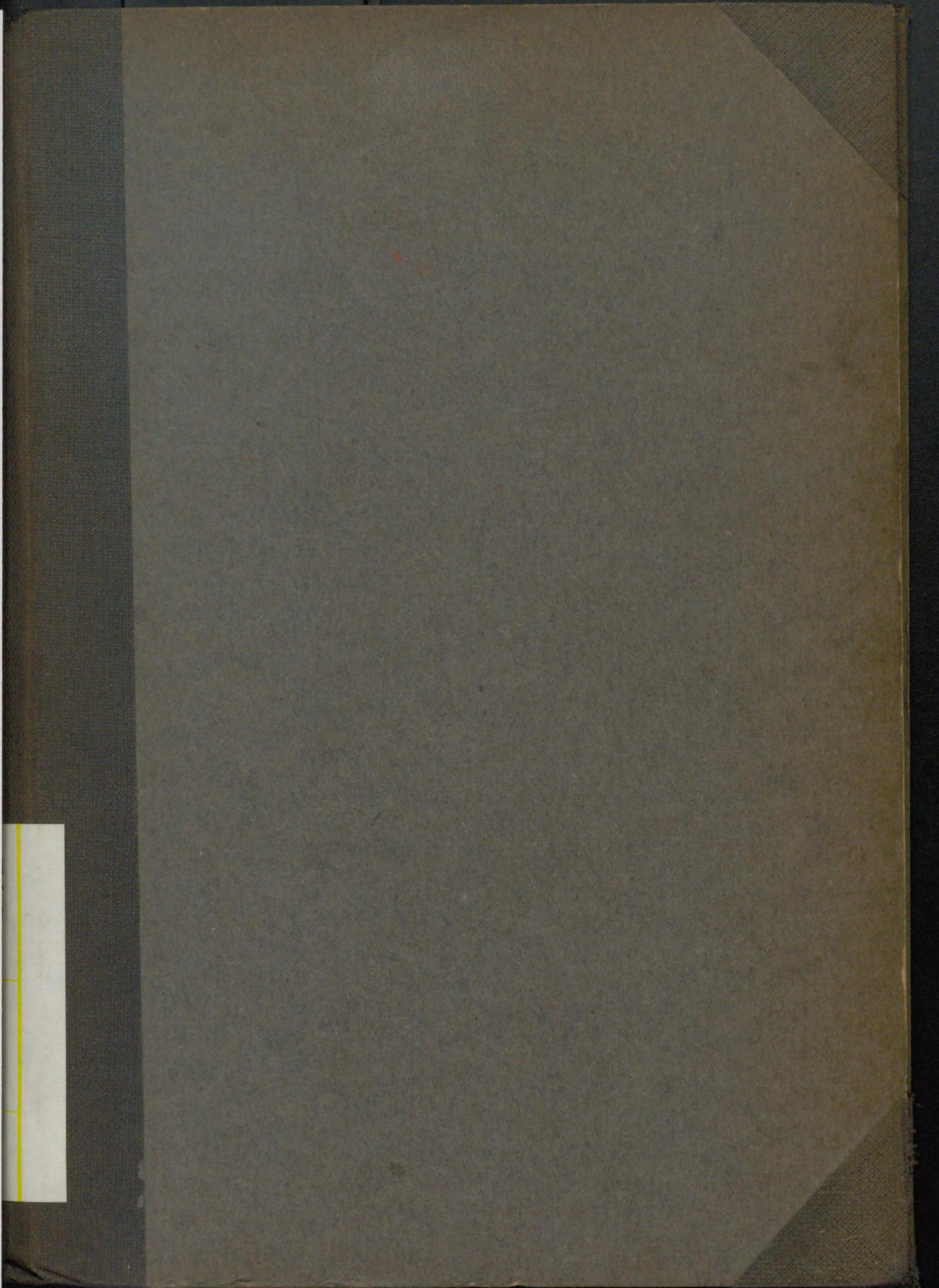
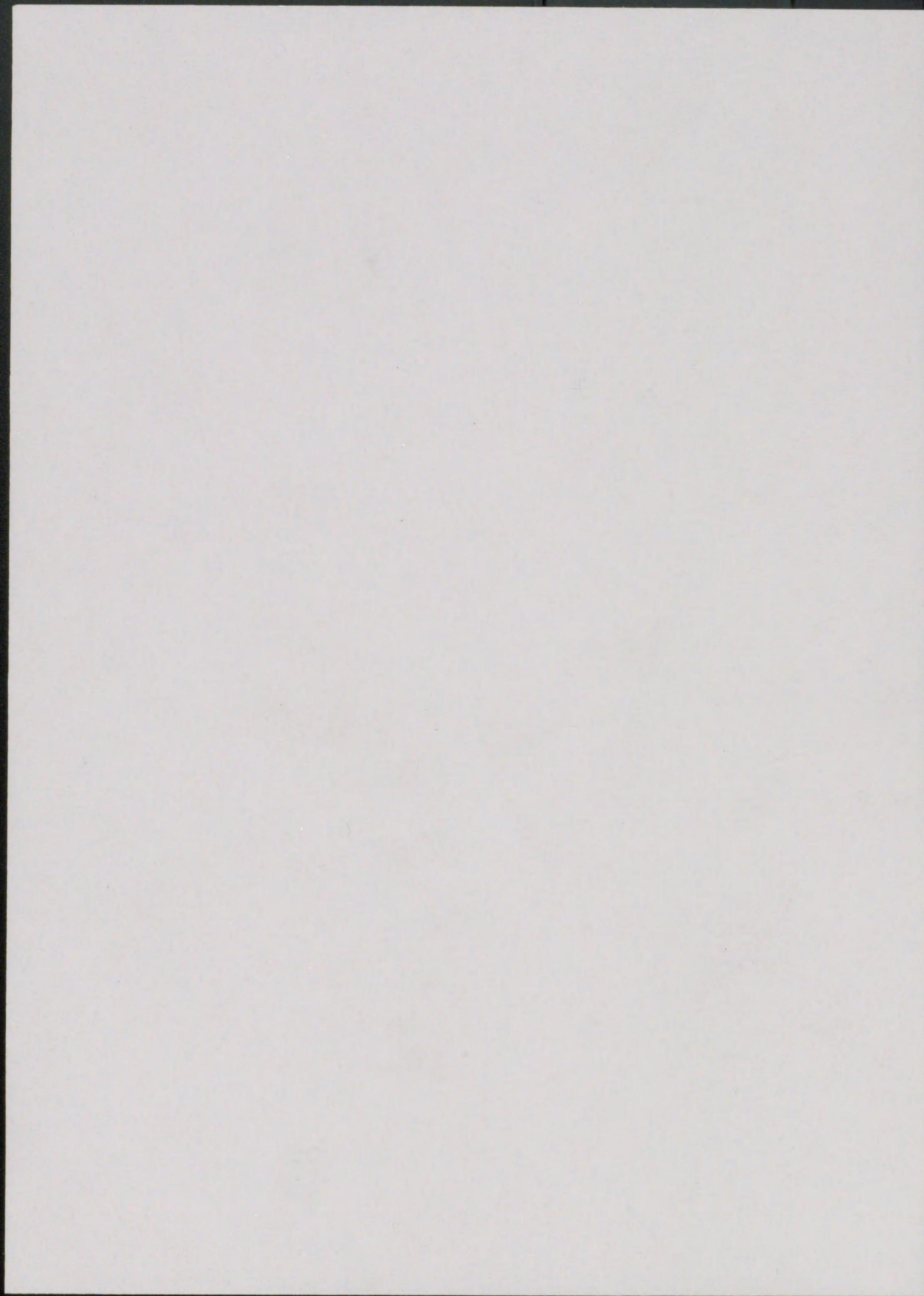
金澤市高岡町一二六番地

印刷所
中川大正印刷舍

金澤市高岡町一二六番地

7/5
100



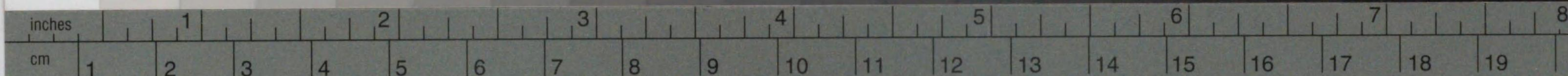


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

